



Les Amis de L'Orgue de Tokorozawa MUSE

改修前に行われる私の公演も6月15日の500円コンサートと11月3日のリサイタル『バッハの散歩道』を残すばかりとなりました♪一つ一つの公演が終わる度にほっとするような寂しいような気持ちですが、最後にふさわしい公演になるように心を込めて準備してまいります！みなさま、どちらの公演もぜひいらして下さいね。今回はその前に、大巨匠の演奏会を大特集♪

🍏 7月16日（月・祝）伝説のトン・コープマンが2年ぶりにミュージズに登場

前回の熱演も記憶に新しいバロック音楽界の巨匠トン・コープマンが再び所沢ミュージズにやってきます。名だたる巨匠達が次々この世を去る中、真のバロック音楽を追究した第一人者の演奏を生で聴ける機会を逃す訳にはいきません。みなさんは、コープマンの著書『トン・コープマンのバロック音楽講義』（音楽之友社出版、風間芳之訳）をご存知でしょうか？この本を読むと、彼がどれほど深い研究に基づく知識をもち、その結果あのような斬新かつ説得力ある解釈が生まれたのかが分かります。その序文の中で

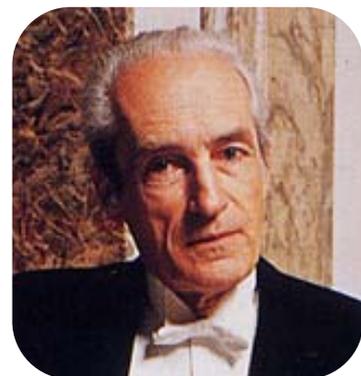


コープマンは「本書の目的は既成の答えを提示することではなく、読者が自ら資料によって結論を導き出し、自らを相対化することを学んで、さらなる探求へと誘うことにあります」と書いています。私は前回所沢ミュージズでの演奏で、自らの研究の積み重ねによって導かれた表現力、度肝を抜かれるような自由な発想、インテリジェンスに捉われない生き生きとした音楽そのものを感じました。

🍏 “古楽”の先駆者たち



指揮の分野では、20世紀後半からアーノンクール（写真左）やブリュッヘン、クリスティ、クイケン一族などが、鍵盤楽器ではレオンハルト（写真右）、フォーゲル、シャピユイなどがヨーロッパ各国でバロック音楽の演奏の本質を求めて研究し、古楽器を使った演奏を押し進めてきました。中でもコープマンは、アンサンブルの指揮とチェンバロ&オルガンなどの鍵盤楽器奏者の両面において古楽演奏を追求し、牽引した一人です。今でこそ、私たちは『古楽』というジャンルの音楽、『古楽器』による



演奏を当然のように聴くことができますが、彼らが若かりし頃20世紀後半は今とは全く異なる状況であったに違いありません。

🍏 “古楽”のいま

古典期、ロマン派を経て完全に歴史の一部となったバロック音楽は、1900年代初頭にバロック時代に戻ろうという「古典回帰」の流れで復興の兆しをみせます。しかし、それは近現代の音楽環境にバロック的な要素を盛り込んだ融合体で、「ネオ・バロック」と呼ばれるものでした。その後20世紀後半になると、前述の先駆者達によって、実際にその時代に存在した楽器を用い、その楽器に適した演奏方法で演奏する『古楽』というジャンルが確立するのです。彼らの元で学んだ弟子達はその教えを広く伝え、今ではその孫弟子を中心に優秀な奏者が育っています。バッハ・コレギウム・ジャパンでもお馴染みの鈴木雅明氏もトン・コープマンに師事していました。今では古楽器に対する研究や理解も深まり、「その時代の習慣や哲学に従って演奏する」という概念も浸透しています。その概念が古楽の分野を超えて今の演奏家の信念として根を下ろすことが出来たのは、まぎれも無く、かの先駆者達の功績といえましょう。そんな歴史に刻まれる伝説のコープマンの演奏をどうぞお楽しみに！



17世紀のチェンバロ



プログラムは、バッハのクラヴィーア練習曲集第3部を中心に、バッハが影響を受けたブクステフーデやケルル、バッハに育てられた次男カール・フィリップ・エマニュエルの作品など、盛り沢山の内容が並びます。今回はどのような演奏で私たちを驚かせてくれるのでしょうか！！

演奏プログラム一覧

J.S.バッハ：小フーガ ト短調 BWV578

J.S.バッハ：前奏曲とフーガ 変ホ長調 BWV552

J.S.バッハ：コラール前奏曲「おお人よ、汝の罪の大いなるを嘆け」 BWV622

J.S.バッハ：クラヴィーア練習曲集第3部より

「キリエ、永遠の父なる神よ」 BWV669

「世の人すべての慰めなるキリスト」 BWV670

「キリエ、聖霊なる神よ」 BWV671

ケルル：バターリア 八長調

ブクステフーデ：前奏曲とフーガ 二長調 BuxWV139

C.Ph.E.バッハ：オルガン・ソナタ 二長調 Wq70-5

